

文化高知 20

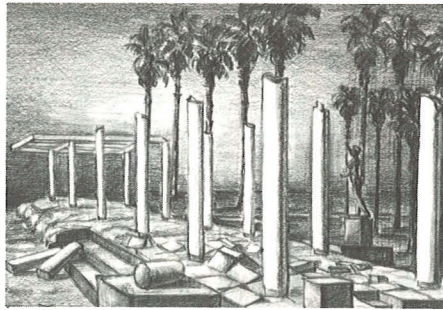
美遊創潤

経済のソフト化あるいはソフトノミックスということが言われて久しい。ものを生産することだけでなく、サービスや情報、技術、デザインといった要素が重視される経済状況を表す言葉だが、産業構造の変化とともにそれは着実に進行している。そして今や、軽薄短小から美遊創潤の時代に移ったとまで言われるようになった。この流れに対応しうる感覚、感性を持ち合わせていなければ、経営者として失格とされてもやむを得ないであろう。

翻って高知に目を移すと、ソフト化の動きは緒に付いたばかりで、アイデアや情報といった人間の創造性にかかるところ、目に見えない部分に、充分な対価はまだ払われていないようである。高知の顔づくり、高知市の街づくりを考へても、計画立案の際、ハード面は具体的に目にも見え分りやすいが、ソフト面の理解を得るには非常な努力を要するのが現状である。このソフトがハードなものより重要な位置を占めることを、どれだけ数多くの人間が認識するか高知の民度が現れると言うと、言い過ぎだろうか。

我々経済人が政策に対する提言を行

う場合も同様である。地域開発を考えると、地域振興の牽引車となる道路、港湾等のものづくりにもどうしても重点が置かれる。もちろんそれは重要であるが、一方でソフト開発を提案し、行政の施策に反映していくことも必要で、



「消えゆく風景」北 泰子

それがなければ、市民から賛同と感動が得られる地域づくりはできない。今日、消費者のものの見方、考え方はどんどん進んでいる。それに追いつき、追い越すソフトづくりの能力を磨いておかなければ、経済活動も成立しない。

澤村 拓夫

例えば店舗づくり一つをとっても、迫り来る高齢化社会、あるいは高度情報化、国際化の流れを考慮していないと、ビジネスとして成功しない。反対に、高齢化社会に対応した先進的な店舗づくりに成功すれば、そのノウハウを全国に売り出すことも考えられる。

それこそ、高知独自の地域性に根ざしたソフト化と言えるのではなからうか。ところで、私が関わっている龍馬記念館建設運動は、設計にコンペ方式が取り入れられ、この十一月から応募受付を開始、具体化へ更に一步を進めることになった。記念館建設には様々な意義があるが、私はそれよりこの運動そのものを大事にしたい。県下の各種十二団体が結集し、横断的交流ができたことは素晴らしいことで、人材育成にも有意義であった。パワフルな県土づくりの推進母体となる可能性をも秘めているこのネットワークを、更に継続、発展させなければならぬ。

なぜなら、人にまさる財産はなく、ソフト化への対応の鍵を握るのも結局は人だからである。

(株)関西土地代表取締役
龍馬生誕百五十年記念事業実行委員会委員長

高知への苦言 一言、二言

大黒東洋士

大正十五年（昭和元年）春、高知城東中卒業と同時に東京に移り住んだから、高知十八年、東京六十一年の生活になる。明治は遠くなりにけりというが、私にすれば、明治も高知も決して遠くなりにけりでない。明治生まれでも戦後派に負けずに仕事（映画）に熱中しているし、高知もいつも身近に感じている。体力の老化だけは如何ともし難いが、常に日々これ新たななり、古きを温めて新しきを知る心構えでいる。

その土佐へは二、三年に一度くらいの割合で帰っているが、この空の旅の時代に、私はほとんど陸路で、飛行機利用はこれまでに二回だけ。四年前旧知の岡田嘉子女史を高知市夏季大学の講師に紹介した時、案内役としてやむなく空路にした。二回目は今年の五月、今井正監督と三泊四日の土佐映画遍路行の時で、これもお付き合いからである。短時間の航空便は重宝だろうが、私のような何年に一度の帰高では、早目に手順よ

移り変わる車窓の風景も旅情もなく、東京からアツという間の一時間二十分、映画でいえばファースト・シーンとラスト・シーンがあるだけで、肝心要の前身（ストーリー）のない空の旅の空しさを痛感しないではない。

ついでに高知文化に関連のあることを遠慮なくいわせてもらうなら、高知駅で下車してから播磨屋橋までの道筋の、なんとゴースト・タウン的な味気なさ。陸路初めて高知を訪れた旅人が高知市の玄関口で受ける第一印象たるや、恐らく索漠たるものだろう。事実、私の知る知名人の何人かから、そんな苦言を聞いている。朱塗りの播磨屋橋も幻滅の一つ。品がなくて目立ちたがり屋以外のなものでもない。

実は近年、帰高ごとに一つ二つと不満が増えるのが寂しい。あの筆山のひどさ！ 岡田嘉子女史と帰った時、でっかい像がおっ立っているのに呆れた。女史も眉をひそめていて、私は恥ずかしい思いをした。環境破壊のなんたる不粋さ。

清流だった鏡川も今はなんの風情もない。これでいいのだろうか。ひどいのは江ノ口川だ。私の少年時代からひどい汚濁で、小高坂の家から城東中へ通う道すがら、旧刑務所脇では悪臭が鼻をついたものだったが、

高知市政は半世紀以上もたちながら、何をシチヨルカノウ。九州のヘドロ化した柳川市の堀割りを蘇生させた経緯を描いた記録映画『柳川堀割物語』でも見て、他山の石にしてもらいたいのものだ。

一連の文化事業にしても、たまに首を傾げたくなるような出し物が目にとまることがある（高知新聞は毎日見えています）。私の領分の映画の世界にしても然り。メジャー系の映画館は心太式の天下り興行だからどうもならんが、高知の上映番組に乗らない優秀な外国映画が実に数多くある。言うは易く行うは難しで、映画サークルなどで自主上映したくても出来ない作品が多々ある反面、そうでない作品も決して少なくはない。ただ問題は、いわゆる商業主義的でない作品の選択上映に当たって、好事家好みの象牙の塔に入り込むのは考え物だ。先日監督の熊井啓君との話の中で、「映画は楽しくなくちゃあダメですよ」と彼。硬派の社会派監督として知られている彼にして然り。この「楽しく」という言葉には重い意味がある。由来、映画史に残る名作は、どれもこの「楽しく」に、「芸術性」が伴って光芒を放っている。映画文化の正しい見方、理解もこんなところから始まるのだろう。

（映画評論家）

第三コーナーに さしかかかって

やまき すまこ

台所である日、手首に火傷をしたので、手当てを受けるべく、近所の外科医院に行った。診察室に入ると、頭髪の薄くなりかけた、人の良さそうなおんちゃん医師がいた。お金を払って帰りがけにふと受付の上を見ると、プレートに表示された医師の名を見つけた。あわてて曜日を繰ると、まさしく、先程の医師がその人であった。二十数年の歳月はイガ栗頭の少年を、アデランスのいる「おんちゃん」に変えたのである。浦島の玉手箱をあけた時と同じ現象が目の前で起こるのを目撃した、劇的な日であった。

窓会を開いた。ベビーブームの生まれて、一学年十クラスもあったのだが、卒業時に同じクラスだったメンバーを召集した。

私は幹事だったので早目に会場に行った。一人の女性がはや到着していたが、穴のあくほど顔を見つめても、誰だったか思い出せないのだ。二十五年とは、それほど残酷な長さの時間だったのだ、と思ひ知らされる。そうこうしているうちに、もう一人、男性が現れた。これもお互い指さしあって、「だれ、だれ？」と顔のどの部品でも記憶にあるものはないかと三人でしげしげ見合ってもわからない。

しかし、ひとたび名を名乗ると、何かの薬品を顔にかけたように幼な

顔が浮かび上がって現在の目鼻と重なる。その謎めいた瞬時の化学変化は見ものであった。

◇ それにしても、小学校を卒業したのはほんのこないだだと思っていたのに、時は、たちもたったり、四半世紀とは。

それぞれの歳月を顔や体つきに刻んで集まったその夜の興味は書いて余りある。たとえていえば、読みかけてそのままになっていた小説の続きを読んだような、懐しさと感慨があった。なるほど、とあつさり腑に落ちる素直な短篇のような人もいれば、前半のどの伏線を読み落としていて、かくなる有様になったというのか、と頭をひねってしまうプロットの人もいた。どちらにしても読みごたえは充分である。二十五年がその人を彫琢したありようは、まさしく一編の読みものであったから。

◇ ところで、この同窓会を思いついた動機は、告白すれば、いささか不純なものであった。というのは、初恋の人に会いたいという下心があったことだったから。

初恋のN君は関西方面に就職したという風聞を聞くだけで、それ以上の消息は誰に尋ねても不明だった。それがあつた日、あつと息をのんだ。

我家のわんぱく次女のクラス名簿の保護者欄にその名を見つけたのだ。灯台もと暗しとはこのことだ。N君はどんな男になっているのか好奇心をそそられる。その時から同窓会は画策された。

働きつつ苦学した都会生活を経て故郷に戻り、家庭人としても職業人としてもかけりのない日々をおくっているN君の二十五年の物語は、たとえていえば東芝日曜劇場風——アクの強くない、後味の悪くない——な自己完結性をもっていた。実をいうと、ちょっと意外であった。小学生時代のN君は、父親と二人暮らしで、体が弱く学校も欠席がち、と女の子が気掛かりになるような脆い雰囲気をもっていた。早熟だった私はいち早くそれに感応したのであったが、彼が生活者としてこれほど骨太であったとは。反対に、人一倍しっかり者と見られていた私は結婚に落ちこぼれ、「お前はもつと賢いと思いたらくである。

◇ 同窓会を終えて、それぞれの場所へ皆帰ってゆく。次の二十五年、物語の完結編めざして。信号待ちをして歩き出す町は、人生の第三コーナーに見えた。

（高知市立誠和園指導員）

子どもたちに二度と戦争の絵を描かせないために

アウシュヴィッツが訴えるもの

宮田 光雄



「アウシュヴィッツ」で生き残っていた子どもたち

アウシュヴィッツへ

「ポーランド」から連想されるものといえは何であろうか。社会主義国。映画。八〇年代初頭であれば「連帯」。そして、第二次世界大戦まで遡れば、アウシュヴィッツである。

ドイツ政治思想史を専攻する私は、かねてからアウシュヴィッツ（ポーランド地名オシフィエンツィムのドイツ語読み）を訪ねたいと願っていた。なぜなら、アウシュヴィッツはナチ・ドイツ支配の極限形態であり、ナチ研究ひいては現代史理解のため「原点」として存在しているからである。

願いがかなえられたのは四年前の夏のことだった。一九三九年、ナチ・ドイツはポー

ランド侵略を開始、第二次世界大戦が始まった。大戦中のポーランド兵・市民の死者は六百万人にのぼるといふ。この内、半数は強制収容所で殺害されている。

強制収容所はナチ占領下のヨーロッパ各地に建設された。その数は絶滅施設等を含むと千を超え、虐殺された人びとは一千万人を超える。アウシュヴィッツは収容所中最大のものだった。

想像を絶する世界

ポーランド南部のクラクフから車で約一時間、オシフィエンツィムの町はずれに強制収容所跡があった。戦後、ポーランド政府は、ここを警告と記念のために博物館として保存、公開している。

収容所の正門には「働けば自由になれる」というドイツ語が掲げられている。これはまことにナチ的アイロニーに満ちた言葉である。強制労働の末にもたらされた自由は、死でしかなかったのだから。

鉄条網の仕切りの中に堅牢な赤レンガ造りの収容棟が二十八棟、二列に並んでいる。鉄条網は二重になっており、当時は三八〇ボルトの高圧電流が流れていた。

収容棟の中には写真パネルのほか、当時の生活を原型のまま伝えるものが残されている。

その印象は生々しく、凄惨だ。部屋一杯に積み上げられた囚人たちの靴や眼鏡、カバン類。切り取られた女性たちの髪の毛の山、それからつくられた織布まで展示されている。

苦難にある人びとへの鋭い感受性と地球の全生命に対する共感と畏敬こそ、「アウシュヴィッツ以後」の人間が今求められているエトオスにほかならない。

「アウシュヴィッツ」を生き延びた子どもたち

ここに一冊の画集がある。『子どもに映った戦争』と題されたこの本は、まさにナチズムと侵略戦争とを体験し生き延びたポーランドの子どもたちが、見たままを書き残した画文集である。拙い絵ではあるが、そこにはナチ・ドイツの犯した罪の全てが書き込まれている。戦争の残

ここは人間の想像力を越えた世界だ。そして、シャワー室と偽って囚人が連れ込まれたガス室。ぎっしりと押し込まれた中に毒ガスが注入されたため、人びとは「立ったまま岩の列柱のように」なって死んでいったという。何という狂気！

しかし、アウシュヴィッツの本当の姿は、ここから三キロ程北にある、当時アウシュヴィッツIIと呼ばれたビルケナウ収容所にある。この収容所の規模は、想像を遙かに超えていた。視野の及ぶ限り、延々と見張塔や鉄条網が続いている。監視塔本館の入口「死の門」から、鉄道引込線が真っすぐにガス室廃屋跡まで通じている。ここにはガス室とクレマトリウム（死体焼却炉）が四室も作られ、一日四千四百人余の処理能力を誇っていた……。

悲劇を繰り返さないために

アウシュヴィッツはナチ的狂気の象徴であった。それは、人間がどこまで非人間的でありうるかの政治的実験だったということもできる。そこで加えられた残酷極まる数々の行為は、健全な人間の理解力を超えていた。

むろん、同時にアウシュヴィッツの多くの記録は、そこで人間があくまで人間であり続けえたことを証言していたのだ。

この本の原画展「愛・平和・未来・そして子どもたち／ポーランドの子どもに映った戦争」原画展が全国を巡回し、この十一月には仙台で、十二月には高知でも開かれるという。私も多くの人にこの絵を見てもらいたいと願う一人だ。そして、戦争の悲惨さ、平和の尊さを感ずってもらいたいと思う。

なにより、子どもたちに二度とこのような絵を書かせてはならないのだ。

（東北大学法学部教授）

（東北大学法学部教授）

次のように述べている。「後になって過去を変えたり、起こらなかったことにするわけにはまいりません。しかし過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです。」（『荒野の40年』岩波ブックレットより）

アウシュヴィッツは、その行為が何びとによって、また何びとに対して、また世界のどこの地域において生ずるものであっても、繰り返されることを阻止するため、我々の決意を促すいわば烽火とならなければならぬ。

悪くなった人を速やかに、外に連れ出します。休憩時間には、皆、ロビーでシャンパン等を飲んで、演奏会についてのおしゃべり。舞台には、お花も飾らず、演奏後の花束も一つだけ、制服を着た係のおじさんが、儀式のような感じで持ってきます。演奏会はだいたい十時頃終わり、今度は知り合い同志で、レストランやワインケラーに行って、食事をしたり、お酒を飲んだりして、余韻を楽しみます。

子供達は、毎週教会に行ってお祈りや歌を聞き、自然に音楽が身についていくのです。演奏会は、子供にとると長時間なので、親がもう大丈夫だと判断すると、連れて行ってもらえます。勿論、子供だけを対象にした演奏会もマリオンネット劇場もありますし、特に「ヘンゼルとグレーテル」のオペラ等の時

留学と仕事の関係で、六年程ミュンヘンで生活した私は、この時期が来ると、また、暗くて長い厳しい冬がやって来たと、少々重い気分になっていたのを思い出します。が、長時間、外にいる事の出来ないかわりに、国立、市立の多くの美術館、博物館、音楽ホールで豊かな時を過ごす楽しみがあったのも忘れられない思い出です。

演奏会は、だいたい夜八時から始まりますので、仕事を終えた人達は一度家に帰り、ドレスアップして、昼間の雑用を忘れ、心の切り換えが出来た頃、気分もゆったりと会場に現れます。演奏会場の扉には、外側と内側にドアおじさんが制服を着ていかめしく立っており、演奏中の人の出入りを禁じます。また会場内には、必ず看護婦さんがいて、気分の

音楽のある生活

山崎 晶子



悪くなった人を速やかに、外に連れ出します。休憩時間には、皆、ロビーでシャンパン等を飲んで、演奏会についてのおしゃべり。舞台には、お花も飾らず、演奏後の花束も一つだけ、制服を着た係のおじさんが、儀式のような感じで持ってきます。演奏会はだいたい十時頃終わり、今度は知り合い同志で、レストランやワインケラーに行って、食事をしたり、お酒を飲んだりして、余韻を楽しみます。

には、皆、ワーワー喜んで聞いて、この時はかりは、子供達の出番のようです。また、学校の授業が午前中で終わりますので、教科課程にはないスポーツ、美術、音楽については午後、専門学校に通い、そこで皆、自分の好きなことを身につけることもできます。

七年程前になりますが、私が学生だった頃は、年間四千円位の授業料を納めれば、毎晩どこかで開かれています。ドイツトップクラスの演奏会を五百円程度で、また世界のトップクラスの演奏会でも、千円程度で聞くことができ、音楽学生にとって、本当に夢のような生活でした。質素な中にも充実感があったのは、文化的な余裕があったからだと、今感じています。

（ピアノリスト）

野に さえずれ

鶯

岡部 功

巣づくりから巣立ちまで

ウグイスは夏の繁殖期には山に住み、冬になると暖かい低地に移動する。いわゆる漂鳥で渡り鳥ではない。年二回営巣し、一巣ごとに新しいものをつくる。一回目は高知近辺では、四月初め頃巣づくりを始める。球形の壺巣を横向きにし、口は南に向けない。巣の中に雨が吹き降らないようにするための智慧である。外敵がこないところを選んで低木や竹に掛けることが多く、枝の分かれ目などしつかり固定して巣をつくる。

あるとき、しなりかげんの小枝に掛けた巣を見たことがある。その巣ははじめ口が空に向けており、「オヤオヤばか驚めが」と思ったが、ヒナが孵ったときはその重みでちゃんと横向きになっていた。また、巣は普通他から見えにくいところに掛け

るのだが、周囲まる見えの場所に掛けた巣があった。しかしこれも、抱卵のころは若葉が伸びて全く何処からも見えなくなっていた。きちんと計算しているかのようで、決してどうでもよい巣づくりをしているのではない。

五日ほどで巣づくりを終えると、卵を生む。一日に一個ずつ四〜五個を生む。生み終わってすぐに抱卵せず二日ほどおく。最後の卵が早くかえるからで、こうして卵が孵る時期を揃えるのである。自然の妙というほかはない。十四日間抱卵すると孵化し、また十四日ほどで巣立つ。ヒナは巣の中を無秩序に動き回っているように見えて、長幼の序があるのか並び方の順番がいつも決まっている。本当にそうなのかとヒナに印を付けて試してみたら、いわゆるように決まった順番を間違えることはな

かった。

ウグイスのヒナは、母鳥が餌を運んでくると、一斉に口を開けるが、一口食べると次は口をあけない。他のヒナも一様に口を閉じて静かになる。ヒナに餌付けをするときも、与えそこねてもう一度やろうとしても閉じた口は開けない。だからこういう失敗を重ねるとヒナは弱ってしまう。食べる度に糞をする面白い習性を持っている。糞は白いぶよぶよした袋に入っており、親が食わえて縄張りの外に出す。巣の中へは糞はしない。

巣づくりから巣立ちまでの子育ては、全てメスの仕事である。オスは抱卵も育雛もしないで、梢でホーホケキョーと鳴いているだけである。まことにグータラに見えるが、このオスが何かの理由で死んだり居なくなったりすると、メスは子育てを止めてしまう。オスがいてはじめて安心して子育てをするのである。グータラにみえるオスが、実は巣の周囲を飛び回り警戒の役目を果たしているのである。一夫多妻で、一羽のオスが三、四個の巣を見張っている。

テリトリーと外敵

ウグイスはテリトリーを持っていて、縄張りを守ることに強い闘争心を示す。営巣のころは特に敏感であ

役はもちろん雄で、雄親は巣立ちしたヒナに鳴き声を教えるのだが、ヒナが覚え終わるのは一般に九月下旬までである。しかし、山野のヒナは簡単なグゼリで、翌年になって初音を出す。

付け子は美声の親鳥の声を聞かせて、それを習得させる。いまはもう捕獲禁止で、新しい飼いの鳥を育てることはできなくなったが、教えるのには巣立つてからの旬日が特に重要で、この間にいい親に付けないと駄目である。後でいくら美声の親をつけても手遅れで、はじめに悪声を聞かせる絶対だ。親の鳴きは午後二時ごろが落ち着いて一番いい。だからだ。やらるのでなく時間を限って集中して行うことが大切である。環境にも敏感で、朝倉で飼っていたものを、荒倉トンネルをぬけて弘岡にもっていくと、鳴きが変わったり鳴かなくなることもある。

鳴きを楽しむための鶯飼いの風習は古くからあり、最も古くは応神天皇の時代からあったといわれる。中世では足利義政公の時代に、江戸に入ると元禄のころから流行し、十代家治公、十一代家齊公のころには「御鳥掛」が設けられるほどに盛んに飼われた。明治以後もよく飼われ、ウグイスは日本で最も愛好される小鳥



『日本の野鳥』山と溪谷社より

る。テリトリーは道や谷川を境にしているが、そこに他のウグイスが入ってこようものなら、途端に追っ払いにくる。絶対に見逃さずほんの半歩、一メートルほどの侵入でも許さない。籠に入れたウグイスを人間が持つてテリトリーに入っても襲い掛かってくるのだ。しかしテリトリーから半歩外に出れば、もう知らん顔である。何処からこちらを監視をしているのか分らないが、姿が見えなくても自分のテリトリー全域に常に目を光らせているのである。

最近野鳥観察を楽しむ人が増えているが、営巣のころ気をつけてほしいことがある。それは人間が巣を覗きこんだり、巣に触れたりしてはならないということである。厳密にい

である。飼鳥は、鳴き方によって文字口、仮名口、札幌口、津軽口、土佐口、熊本口などがある。惣兵衛口などという人名のものもある。文字口というのは関東方面の鳴き方で、仮名口というのが関西方面の鳴き方である。いずれも基本は三つの音を鳴き分けることにある。それは上音(あげね)ヒーホケキョ、中音(なかね)ホーホケキョ、下音(さげね)ホホホホケコウ、の三つである。土佐口は、上音を「ヒーツキホシ(日月星)」と鳴くところから「三光鳴き」と呼ばれ、特色がある。「幻の鳥」と言われるほどのものである。

雅びを愛でるこの風習も、新たな捕獲が禁止され、付け子ができなくなつて廃れようとしている。小さい時から鳥が好きで約三十年小鳥を飼っているウグイスだけでも二十五年飼ってきた私にとって、寂しいといえはさきっぱりウグイスを飼うことはやめていく。長い伝統を持つ土佐の「三光鳴き」を是非残したいと言う声もあるが、所詮は「人工」のものである。自然のものを芸にし人間の楽しみに取り込んでしまつてはいくまい。野の鳥は、やはり自然の中におくのが一番なのである。

(春野町議会事務局長)



『野鳥の歳時記1』春の鳥 小学館より

えば巣に近づいただけでもいけないのだ。なぜなら、そうすると必ず人間の臭いを追うようにへびが来て、巣を襲うからである。これは十のうち九つと言うより、十が十まで襲われてしまうのだからどうしようもない。次の日行ってみると必ず巣は空になっていく。ある古老の話では、巣を覗きこんで数分歩いて振り向いてみると、もうへびが巣を襲うべく木に登ってきていたという。自然には自然のおそろしいほど厳しいオキテがある。

現代は鳥にとって住みにくい時代である。鳥の天敵の第一はなんと言つても人間だろうが、直接捕獲をしなくても人間の活動が鳥の数を減らしている例は多い。たとえばウグイスの巣には、苔やシユロの毛が敷かれるが、近頃はそれにビニールが混じつてしまう。すると水はけが悪くなり、ヒナが死んでしまう。また虫

鳴きを楽しんだころ

ホーホケキョーとウグイスが鳴くことは誰でも知っているが、野性のウグイスは、その土地によって鳴き初めの時期が異なり、地方訛がある。野鳥はもとも繁殖の前奏として鳴くのだが、この鳥は繁殖に間のあるときからよく鳴いて私たちを楽しませてくれる。そして多くの野鳥がそうであるように、自慢の囀りを聞かせてくれるのは春も暖かくなつてからである。梅にウグイスとよくいわれるが、梅の花が咲き始めるころ、庭の木に来て鳴くウグイスはチャッチャツという地鳴きの「ささ鳴き」が多い。

鳴きの上手下手は全く後天的なものである。競馬馬のように血統で決まるのではない。ヒナのときに親の鳴き声を聞いて習得するのである。そのためニワトリやカナリヤのそばで飼うと、たまにその真似をするウグイスがきたりする。囀りの指導

〈辺境〉の地から

明治以来の中央を中心とした近代化の中で、高知は「辺境」に追いやられた感がある。この間に染みついた中央指向は、高知の自立的な発展を妨げる心理的要因となっている。しかし、高知は歴史的に見た場合、優れた先進性・国際性と『まちづくり』に対する大きな蓄積を持っている。

たとえば、明治維新まもなく、高知は全国に先駆けて自由民権運動を展開し、全国各地の運動に強い指導性を発揮した。また、この自由民権運動のエネルギーは、多くの人材を生むことにもなり、北海道開拓、あるいは海外へ多くの人材を輩出した。さらに、自由民権運動の過程で新聞を始めとする出版活動が盛んに行われ、各地で学習活動、講演活動が行われるなど、その活動はまさに『まちづくり』として見る事ができる。

一方、高知市は、戦後まもなく、全国的に先進的な事例となりうる市民参加の文化活動（図書館活動・公民館活動等）や一九六〇年代末から七〇年代初めにかけて展開されたコミュニティ活動など全国にも知られる活動がある。

こうした蓄積は、現在の高知市民の体内にそのエネルギーが継承されており、潜在的に大きな可能性を秘めているといえる。

ここではこうした蓄積をふまえて高知における『まちづくり』の方向について「ストック」(アイデンティティ)「ネットワーク」という三つのキーワードを用いて概念的に整理してみることにする。

『まちづくり』のための三つのキーワード

特に、国際交流は、改めて『世界の中の高知』を明らかにすると共に、高知の個性的な方向性「アイデンティティ」をそこに見出す。

したがって、こうした市民・団体の交流を活性化させ、それをネットワーク化することが、今後、極めて重要な活動である。

アイデンティティのある高知に

『まちづくり』を推進する場合、まず不可欠な要素は、その土地に根づいた個性の存在である。外から入ってくる異文化を受け入れるにせよ、突き返すにせよ、いずれにしても自らがよって立つべき自分の座標軸「アイデンティティ」といったものが必要となる。

地方都市の個性の喪失と画一化の中、「辺境」の地にあった高知においても画一化の嵐は強く、その多くは破壊されたが、歴史・文化等に根づいたアイデンティティの幾分か残っている。

これからは「自然環境を含む文化的レベルの高い所に優れた人材が集まり、産業が発展し、地域が活性化していく」という。であるなら、アイデンティティを幾分か備え、自然環境を中心とした豊かな資源を保有する高知は、新たな地域発展の可能性がある。

しかし、アイデンティティある「まち」を創り出していくためには、地域に密着した担い手が必要である。幸い高知においては、地域に根ざした、おしきせでない、手づくりの市民活動が育ちつつある。

こうした個性ある活動を進めている団体・市民、イノベーターを、より多く発掘し、育てていく努力が必要である。

ストックを生かし、ストックを創る

連載■〈街づくり〉の現在③

“まちづくり”への視点と方向

大谷 英二

(株)若竹まちづくり研究所長
東洋大学工学部講師

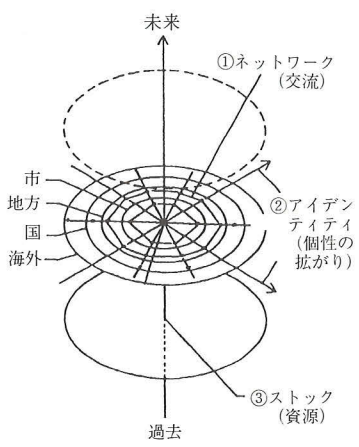
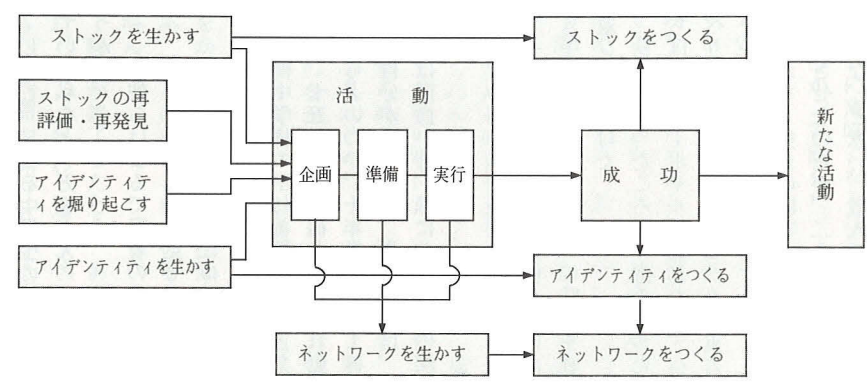


図1① 『まちづくり』の方向概念図

図1② 『まちづくり』への取り組み方概念図

②の三つのキーワードを軸に活動の取り組み方を概念化すると右のようになる。
〈掘り起こし〉→〈生かし〉→〈つくる〉という段階構造である。



高知の『まちづくり』を推進していくためには、高知がこれまで保有している資源「ストック」を十分に活用し、高知らしさ「アイデンティティ」のある活動を創り出していく必要がある。そのためには様々な交流「ネットワーク」を必要とし、その交流がまた、その後の活動を豊富化するという関係にある。

すなわち、この「ストック」(アイデンティティ)「ネットワーク」という三つの言葉が高知の『まちづくり』にとって欠かせない関係にある。そこで高知の『まちづくり』を、この三つのキーワードから概念化すると図1②のようになる。

人間主体の交流を

人と人、地域と地域の交流、国境を越えた交流など「交流」が益々盛んになっていくことが予想され、このところ国際交流にせよ、国内の地域間、あるいは県・市内の交流にせよ、外と交わり、自分とは異なる相手を知ることとは、同時に、より広い視野から自分自身を見直す機会でもある。今、大切なことは、市民の一人ひとりが交流を通じて、たとえば小さな小さなところからでも、お互いに共有しうるものを見出ししていくことである。人間主体の交流と、そこから生まれる情報は、一人ひとりの意識を活性化させ、ひいては地域の活力を生み出す原動力ともなるのである。

アイデンティティの確立には、高知の歴史・風土・産業・文化・人材・地域のイメージ等の地域資源「ストック」の活用と、人為的な創出が必要である。歴史的なストックや、文化的な活動のストック。さらには、『よさこい祭』にみられる市民のエネルギー。『日曜市』や『はりまや橋』そして『坂本龍馬』に代表される地域イメージ。また、自然的ストック。さらに、まんが家など、県出身で、現在は県外で活躍している人材など。

こうしたストックを生かすことが、アイデンティティの確立につながる。

『ストックを生かし、ストックを創る』という視点から各種の活動を立案し、アイデンティティがあり、質が良く、耐用年数の長いストックを創り出していくことが重要である。

『共働(共に働く)』領域の開拓

特に、質の良いストックを創り出していくためには、『時代を切り拓く』市民活動グループの存在と、これらの活動を一部のグループの一次的な活動に終わらせることなく、正当に受け止め、育て、地域社会の中に定着させていく組織が必要である。

『まちづくり』とは、個々の住民、各種の民間団体、行政等、地域における多様な活動主体の、ある地域における「共働の企て」であり、「共働の企て」とは、あるべき高知の実現にむけて各活動主体が資力や知恵を出し合って協調するシステムである。

したがって、住民及び各種団体と行政がそれぞれの「土俵」から一歩踏み出し、新たにつくり出された「共働」の領域を開拓し、「共働」の作業をいかに進めていくか、住民や各種の団体が自らの地域の『まちづくり』にいか

に責任を持つかが問われているのである。

残酷な神々

竹内 直人

評判の歌集、俵万智さんの『サラダ記念日』を、私も読んだ。彼女の日常生活での物の見方や感じ方に、共感できるものがあって、この本が多くの人びとに支持された理由が納得できるように思った。

私が好きなのは、『橋本高校』の章である。ここに歌われている二十七首の作品には、教師という職業に就いている若い女性のヴィヴィッドな感情が、はつきりと、しかも生き生きとした形で表現されている。印象にのこった歌に次の一首があった。

センセイを評する女子中学生の残酷揺れる通勤電車
小田急線であろうか、電車のなかで担任の教師を評する女子中学生の姿が、万智さんの目と耳にはいつてくる。彼女たちの会話に、万智さんのところは微妙に揺れる。「あのセンコーったらあ、ホ、ン、ト、ニ腹がたつ

中学生それぞれの時

十分たつても、二十分たつても、見つからない。一時間を過ぎたころ、陽はすでに西に傾き、私も少々不安になってきた。のこされた四十人の子どもの表情もだんだん陰しさがました。

と、そこへ、落日の方角から、二人の男の子がヒョッコリ現れた。まるで忍者のように。どうしようがたあ？といういつせいの声に、「家に帰ってテレビゲームをやりました……」と呟いたものだから、一時間も寒い公園で待たされた生徒たちの怨嗟の声は、爆発した。

「おんしゃあ、許さん」
「ぶんなぐるぞお」
なかでも、三人の女の子たちが、「あんたらあのおかげで街に買い物に行けなくなったやいか」と、その二人の男の子の胸倉をつかんで大変な見舞である。彼女は、日ごろ、校則違反のファッションで登校したり、タバコを喫っているのを見つけられたり、叱られる側にいることが多かったので、立場が逆転したら、それはそれは厳しい糾弾の声。

「どうしたら許してくれるがぜ？」と二人の男の子は今にも泣き出しそうな声である。
裸になってみんなに謝れ。一人に一万円ずつ配れ。江ノ口川の水を飲め。コケッココというて町中を歩け——。冗談半分とはいえ、ずいぶん「残酷」な要求である。イジメを描いた映画にも出てきそうなセリフが飛びだしてきたので、それまで横で聞いていた私も、もう出番とあいだにはいった。

言葉での謝りだけでは納得しないという強硬派の要求に、二人の男生徒の出した案というのは、「今から学校に帰って、二年一組の受け持ちの掃除区域を二人できれいにする」というものだった。「何せ、そればあのことかえ……」と不満顔の強硬派も、

んだからあ！
「あつたまにくるわねえ」
「いやなのよねえ、あのババア教師。しつこくつてさあ、ぐちぐちいうしさあ、あれじゃあ、結婚相手がいなかったワケよねえ」
……と、まあ、こんな会話であつたかどうかはわからない。
しかし、日ごろ中学生の「残酷」な会話の餌食にされている私など、万智さんの歌の光景が、まざまざと目にかぶ。

「彼らはまるで忍者のように神出鬼没で、なかなか確かな姿の全部を見せない。ある時には鬼か悪魔かと思わせ、ある時には神か仏の姿を見せ、その心の揺れ幅は想像以上に大きい。」

青柳中学校の田村善穂先生の言葉である。十三歳、十四歳、十五歳の彼女らの揺れ動くところを何と表現したらよいのか。十年教師をして確たるものを呈示できない自分が情ないが、逆にいえば、まことに中学生というのは面白い、私にとって奥の深い存在なのである。

以前の勤務校、城東中学校でのことである。その年は、二年生を担任していたのであるが、あるとき午後のホーム・ルームの時間を利用して近くの公園に遊びに出かけた。

秋の深まったところで、澄みきった空気のなか中学生たちは、バレーボールに興じたり、ベンチに座っておしゃべりに花をさかせた。私は八木重吉の詩集を枕に大空にむかって横たわっていた。

やがて、集合の時刻である。生徒の代表委員に人数を点呼させたのだが、二人の男生徒の姿がない。どうしたのかな、と思い、数人の生徒に捜しに行かせたのだが、

しだいに薄暗くなりはじめた周囲の空気の重さにせかさされたのか、妥協した。

ふだんより二時間近くも遅くなった下校時刻に、クラスの子どもたちは燕のようなスピードで帰宅を始めた。「さあ、やるか。おれも手伝う」。二人の男の子と私はみなに約束した通り、教室に残り、机とイスを運び、箒でゴミをはいた。三人だけの労働で、この日の教室はやけに広く感じた。額に汗がにじんだ。

床を雑巾でふきはじめたときである。教室の前方の戸があいて「やりゆう。やりゆう」という声。見れば先ほどの強硬派の女生徒たちである。「お前たち、どうしたんだ？」と聞くと、それには答えずバケツを引っ提げて水洗い場に行った。水をいっぱい飲んで帰ってきた彼女は、その水で雑巾を洗い、無言で教室の黒板や机をふきはじめた。

そのなかの一人、オカッパ頭の子が、「たすけちゃおきね」とウインクした。
三人の女の子と二人の男の子が、おたがい照れた表情をかわしながら黙々と掃除を続ける光景を見ながら、「ああ、ここには神と仏がいる……」と私はこのころのなかで叫んだ。

掃除が終了したとき、あたりはすっかり暗くなっていた。「やっと終わったねえ」という彼らの瞳のすずしさに、もう「残酷」なかけりはなかった。「悪魔」が「仏」になったのである。

俵万智さんの歌に、「教室にそれぞれの時充たしおる九十二個の目玉と私」という作品がある。

これから数回、彼ら中学生たちの「それぞれの時」を、お知らせしたいと思っている。

(高知市立介良中学校教諭)

高知市近代年表(八)

- 3月 明治四十三年(一九一〇) 自動自転車(モーターサイクル)初めて高知に入る
- 5・19 ハレー彗星、地球に最接近、各地で流言・噂、不安をよぶ
- 6月 杉山四五郎、知事に任命
- 7・4 市視学を置く
- 7・29 高知県医師会創立
- 8・22 韓国併合の日韓条約調印(8・29国号を朝鮮と称する) 明治四十四年(一九一〇)
- 1・24 幸徳秋水刑死(四二)
- 3月 ゴム輸入力車移入
- 4月 高知市立高知工業学校、帯屋町に開校
- 5・13 谷千城逝去(七五)
- 5月 朝倉連隊、満州より帰還
- 5月 電車、後免町まで開通
- 2月 高知瓦葺株式会社設立
- 3・31 県公会堂落成式
- 3・31 春野神社を森山より五台山に移す
- 4・1 竹内綱により高知私立工業学校(後の県立高知工業学校)開校
- 5・15 第十一回総選挙(政友会二百一十一、国民党九十五、中央俱樂部三十一)
- 7・20 米価騰貴のため臨時減価販売所をおく
- 7・30 明治天皇逝去(六二)、大正と改元
- 8・1 土佐史談会設立
- 藤崎朋之、高知市長に再任

- 11月 土佐製紙株式会社、資本金五百万円で設立
- 大正二年(一九一三) 白洋汽船株式会社設立
- 1月 県立玉水病院設立
- 4月 永井金次郎、知事に就任
- 6月 高知公園懐徳館開設
- 6月 大正橋(山田町・北新町)開通
- 10月 高知ノ琴平、高知ノ徳島間に乗合自動車運行開始
- 11・14 高知開市三百年祭挙行(記念博覧会、山内一豊銅像建設、柳原公園開設)
- この年、大正俱樂部結成(国民党支部解消)
- この年、高知金融無尽株式会社創立
- 大正三年(一九一四) 土佐、高知巡航社合併して、浦戸湾内巡航株式会社設立
- 1・29 高知市、午砲開始
- 6・1 土岐嘉平、知事に就任
- 7・28 第一次世界大戦始まる
- 8・23 対ドイツ宣戦布告
- 9月 高知ノ安芸間乗合自動車運行
- 3・25 大正十二年(一九一五) 第十二回総選挙(同志会百五十三、政友会百八、中正会三十三、国民党二十七、大隈伯後援会十二、無所属四十八)
- 4月 高知県原蚕種製造所を永国寺町に設置
- 6月 土佐木材市場株式会社設立
- 6月 京町に映画常設館「世界館」開業
- 8月 高知園芸株式会社設立
- 8月 高知図書館、県立に移管
- 12月 紙製造株式会社、松浦濾過紙製造工場設立

雑喉場橋

十数年前、高知に越してきた頃は右も左も分からず、戸惑いの日を過ごしていました。そして夕暮れになると、しょうごとなしに川に釣り糸をたれたいものです。◇黄昏時の鏡川を見ていると、ふと昔のひとコマを思い出します。



心と心の共感を求めて

池 正孝

私の芝居好きは、活動写真に夢中になっていた子供の頃から始まった。のちに兵役にあったときは、慰安会で素人芝居を披露したり、戦後に新制中学校の教員になってからは、赴任先の学校で演劇部を創設、あるいは高知を舞台にした映画数本にも出演した。

中学校教員を退職した今でも、芝居とのかかわりは続いている。

昨年私が演出をさせていただき、『郡上の立百姓』（こばやしひろし・作）を県民文化ホールで上演した。これは今から二百七十年前の美濃国郡上で、年貢の収納をめぐる藩や幕府と闘った大農民一揆をテーマにした芝居である。七年前に第一回公演を行い、これが三回目となった。第三回公演パンフレットに、次のような一節が記されている。生

きる手ごたえがほしい。何かを創ることにのめりこんでみたい。こんな想いの素人ばかりが五十数人集まって芝居をすることになった。皆それぞれ自分の仕事や家事をやりくりしての稽古を重ねた。しかし、公演は大成功。役者、スタッフ、観客の胸に、それぞれ大きな感動を残したようであった。

何のために芝居をやるのかと、よく聞かれるが、私は人と人との心の共鳴感を得るためではないかと考える。心と心が通じ合うことこそ人生の幸せではないだろうか。しかし、心は形の見えるものではなく、何らかの媒介が必要である。この目に見えない心をつなぎ媒介するものが、いわゆる「芸術」と呼ばれるものではないだろうか。

私は絵も描くし、写真も撮るが、音楽や映画、演劇といったものは人

の心と心をつなげ、人生に張りを与えるものだと思う。そんな媒体と人生の中で巡り合うことができるのは幸せなことである。

人は毎日毎日老いていく。個人の幸せ、家庭の幸せとは何かと考えると、職業の中に自分の人生を埋没させている人も実に多い。だからこそ、退職するとその人の人生もなくなってしまう。「余生」などという言葉も生まれる。まさに「引き算」の人生である。しかし、人生を主とし、自分でコントロールできれば、働くことも生きる励みとなる。

私が掃除、洗濯もやり、絵も描き芝居もやりながら自分の人生の主役でいられるのは、人間の能力は分散すれば減少するのではなく、二倍、三倍になる場合があると考えているからかもしれない。

◇

現在、中央と地方の格差は縮小し、衣・食・住などをとってみても地方が恵まれている場合も多い。今こそ、この高知でも自分たちのやりたいことができる時代になりつつあると思う。そんな想いを込めて近々私たちは戯曲『船中八策』（入交保・作）を上演する。坂本龍馬が新生日本のために描いた青写真をテーマとする芝居で、

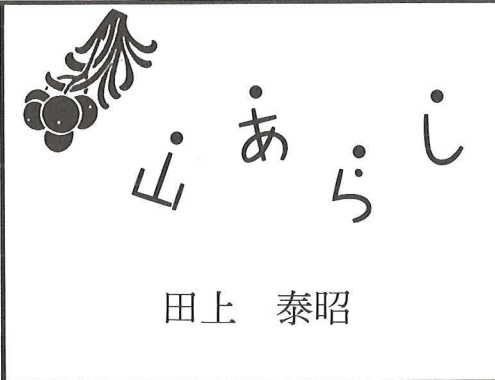


まずはこの公演を成功させることが今の私たちにとって第一の目標である。成功すれば次の新たな段階に進むことができるからである。例えば、役者をダブル・キャストにするとか、あるいは役者を一般から公募するとか様々な形が考えられる。(土佐の遺産)として、この芝居が後々の人たちに引き継がれていけば、こんな素晴らしいことはないと思う。

もしどこかの青年団が上演したいというのであれば、どんなやっつけもらえば結構だし、私の経験で手伝えることがあれば、喜んで手助けもしたい。私が若い人を指導するのはなく、私も彼らの心に共鳴しながら一緒に進んでいければ、それにまざることはない。

「人生とは時々刻々が存在であり、行為でなければならぬ」との言葉を胸に秘め、私は人の心と心の共鳴を求めて、これからも芝居にかかわり続けると思う。(演出家・画家)

1987 11/13金 RKCホール 1,500
18:00 18:30



田上 泰昭

高知に帰って、はや二度目の秋。山の神さんから、今年も心豊かな秋の贈り物です。小さい頃、ずっと一緒だったはずの山の神さんの恵みを、今年は特に嬉しく感じます。

シブチンの栗が笑えば、あけびもつられて笑います。隣の柿も金色に実り、ほら、ススキがおいでおいで

をしています。僕は、ココロとよく笑う栗のつやつやとした肌や、自慢気に胸を張ったあけびに、ついつい翻弄されてしまいます。

僕は山の神さんから、この上ない宝ものを頂きにまいりました。そんなわれら山あらしに、山の神さんは、手も貸さず、邪魔もせず。山か

ら人へ。僕は、確かに山の神さんから、秋の豊饒を頂きました。そして、来年も……。

僕らが山の神さんや、海の神さんや里の神さんへの感謝と、喜びの心を忘れない限り、きっと来年も僕らの手にその実りを頂ける事でしょう。都会には、僕らの両手にあまる、たくさん物たちが溢れています。栗も、柿も、あけびだって手に入ります。色んな国の、色んな物たちに会おう事もできます。けれども、彼らには立派な名前があっても、育ててくれた神さんや、それらを授けた人たちの喜びが、ちっとも見えませんが。見えるのは、レジの女の子の笑顔と、「○○直送」の広告だけ。

みんな、こわばって淋しそうに見えるのは、僕だけでしょうか。

一体、都会の神さんは、どうしているのでしょうか。人が恵みへの感謝と喜びを忘れなかった昔、神さんが人や獣や土のために、恵みを与えた様に、人は人の為に物を作ったに違いない。都会に神さんが見えなくなったのは、人がそんな大切な事を忘れてしまったからか？

それでは、来年も、山の神さんが元気でありますように。僕ら、山あらしを笑って迎えてくれますように。(デザイナー)

質の高い音楽活動を

門脇加江子



グループ'80第8回定期演奏会

グループ'80は、その名称からだけでは分かりにくいかもしれませんが、ピアノを中心とした鍵盤楽器奏者の集まりで現在二十名の会員によって構成されています。高知で同じ恩師の元に学んだ私達はいずれも音楽大学に進んだことをきっかけとして、互いに研鑽を積む場が欲しいという切実な考えからなるようになりました。演奏者は、どんなに才能を持っていてもまた努力を怠らなくても、それを人々の前に提示する機会がなければダメになってしまおうといひます。逆に言えば、その状況の厳しさが演奏者を成長させるということでしょうか。それらのことを話し合ったうえで、年に一度、演奏会形式で発表の場を持つことになりました。そこで私達の共通の恩師である住友弘一先生、向原寛先生に顧問をお願いし、一九八〇年に第一回の定期演奏会を持つことができました。今年八月六日にその第八回を、成功のうちに終えています。

最初こそ学生ばかりで親や先生方の援助に甘え当人は弾くこと

視力障害者とともに

千股 定美

私たちは、今年視力障害者のためのボランティアサークル「ルーモ」を結成しました。毎月一度、日曜日に定例会を持っています。

現在、「盲と目あき社会」(藤田真一著)を参考文献とし、街づくりなど、毎回討論の柱を決め、メンバーでチューターを替わりあいながら研究活動を行っています。また視力障害者の方に参加してもらい、その体験を聞き、実生活と関連づけながら、学習・実践活動をすすめています。

その他に、盲人ガイドの実習や点字の通信学習なども企画しています。点字は難しいと思われている人は多いと思います。しかし、大部分は、五十音の表記が分かれば理解でき、それも規則的で、ある人に言わせれば「一日で覚えらるる」くらいのもので、触読するのは容易ではありませんが、暗読者は目で見ません。活動の一つとして点字ボランティア養成があります。

さらに私たちは、障害者の立場にたった街づくりを考えていきたいと思っています。よく、点字ブロック上におかれた自転車や車などをみかけます。これは、盲人の道をうばっていることです。自治体は作るだけでなく、その利用にも責任を持つてもらいたいものです。

グループ・スイング

目標は「大衆芸術」

竹村 聡



グループ・スイングの演奏風景

グループ・スイングは、昭和五十年に市内の美術愛好家五人によって結成された十年の歴史をもつ「桂会」と、結成一年という新しいグループ「彩四季会」として「桂会」より分離発足した「訪星界」の三会を中心に、昭和五十九年春に発足しました。その後、新しいメンバーを加え、現在約五十名の会員を擁しています。定例会は、毎週火・木・土の十八時、二十一時まで永国寺町のアトリエで行っています。部門は、洋画・グラフィック・デザインをはじめ水彩・イラストレーションなどの他、陶芸・写真・オブジェ等ジャンルにとらわれない個性豊かな作品を出品しています。



自然に還って生きる

自然に還って生きる

西森寿美子

私達「なずな会」は「よく見れば薺花咲く垣根かな 芭蕉」の句にちなんで名づけられています。ありふれた平凡な今ここに一切すべてが在った、という発見をもとに発足、今年で四年になります。現在会員は約五十名、主として主婦で構成されていて、子育て、衣食住の暮らし等、生活文化全般に関わっています。基本にあるのはカウセンシング、アントロピー、エコロジーなどと呼ばれる考えですが、ごく簡単に言えば「文明に頼らないで今ここで自然に還って生きる」ことをモットーとしています。

具体的には、伊野町八田に畑と田んぼと宿泊施設「なずな荘」を用意し、そこを中心として活動しています。「なずな荘」は自給生活が出来るようかまど、囲炉裏、井戸などが備えられ十五名くらい泊まれます。会員はもちろん一般の人も利用できます。畑では小麦を植えてパン作りまでを一工程として取り組んだり、今年は無農薬無肥料で米も収穫しました。鶏や山羊も飼いたいと希望しています。

子育ての学

で精一杯でしたが、今では社会人も増えそれぞれが責任感を持ってより良い活動をしたと考えています。これからはピアノソロをメインとしてその他にもアンサンブルなどで幅を持たせたいと思っています。質の良い音楽活動が地方に根づくことは本人達の地まぬ努力は勿論、経費の面、観客の動員等たいへんなことばかりですが、今までの経験を元により発展的に企画していこうとグループ一同考えています。

連絡先 二五〇六七四(門脇)

また、バスや電車の中で空席があるのに立っている盲人の方をみかけませんか。盲人は空席がどこか分かりません。できれば、手引きをして「ここです」とあいた席に案内をして下さい。このことは、一例にすぎません。

連絡先 二二一八七二二(盲学校・千股)

ばかりだ!」とおほめを頂いています。特に今年はグループ展の後、会員三名がリレー式に三人三様の個展をひらき、成果を発表することが出来ました。また七月には「三女展」もひらかれ、会員個々が自分というものに自信をつけつつあります。

連絡先 二二一八八五七(事務局)

習会はカウセンシングや芭蕉の俳諧へと発展し、アントロピーは老子やニューサイエンスの学習へとつながっています。また新しい生き方を求めて暮らしを交換する「なずな市」も開催しています。

連絡先 二五二〇六一(西森)

バレーボール

天津小学校5年 織香 南部

ドキドキしながら、試合は始まった。がけを歩いているような気分だった。ピッチという合図でコートに入る。私はセッターという、だれよりもむずかしい場所。あせを流して、第一試合は勝った。その時の喜びは、私たちにしかわからない。六年生はせいっぱいやったけれど、負けてしまった。キャプテンが涙をだした時、すこくくやしかった。ぜったい、かたきをとってやると思った。六年生の事を思って、試合をやった。でも、一点しかとれなかった。その一点が光っているように見えた。

風伯

熱気

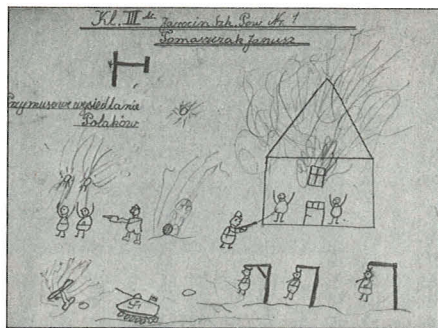
得して廻り、自ら三百万円余の資金を集め初めてイベントを見事に成功している。「徳島で語ろう地域の自立」をスローガンに全国から千五百人を集めた自治体会議は、市の人事課がすべて取り仕切り、職員意識改革に大きく役立ったという。

の自主研究グループがまとめた報告書「公衆便所を考える」は、いま全国の自治体に静かな波紋を投げ掛けている。会員十八名の都市問題研究会は、中味の濃い機関誌「UP」を刊行。「女性の声が聞き易くなった」と婦人グループに信頼絶大な女性企画調整課長補佐Nさんは「横議・横行・横結」をモットーとする管理職の自主研究グループ「DOWN」のメンバーの一人でもある。「地域づくり井戸端塾」を主催し「プラス・ワンとくしま運動」を展開する「新とくしま県民運動推進協議会事務局」の職員は、いずれもシンボルマーク入りの開襟シャツ着用で県内を飛び歩き、現場体験を重視する……。

ポーランドの〈子どもたちの目に映った戦争〉原画展 「愛・平和・未来・そして子どもたち」高知展

本号五ページでも触れられていますが、ポーランドの子どもたちの描いた戦争の原画展を次の通り開催します。ナチ・ドイツの侵略と虐殺を体験したポーランドの子どもたちが、大戦中と終戦直後に描き残した絵と作文を展示し、命と平和の尊さを訴えようというものです。

- 期間 12月15日(火)～20日(日)
午前9時～午後5時
- 場所 県立郷土文化会館
- 入場料 300円(小学生以下無料)
- 主催 高知市文化振興事業団
高知一粒会



ポーランド人の強制退去 3年 ヤヌシ・トマーシュチャック

1944年ワルシャワ蜂起、子どもと女性たちがドイツ戦車の楯にされている
4年 ヤドヴィガ・イージコフスカ



〔関連企画〕永六輔企画・演出による

愛と平和をうたう 前夜祭

- 出演 秋山ちえ子、永六輔
松島トモ子、小泉源兵衛
 - 日時 12月14日(月)午後6時～
 - 場所 RKCホール
 - 入場料 大人1800円
(前売1500円)
高校生以下1300円
- ▼原画展の感想文募集(詳細は後日発表)

第4回高知市都市美デザイン賞 推薦受付開始

事業団では、新しくできた建築物、築造物を市民の方々から推薦して頂き、都市美の創造、文化的・芸術的環境の形成、良好な町並みの形成、地域のシンボル性、等の点を選考基準にして「高知市都市美デザイン賞」をおくつていきます。あなたの感性にかなう建築物を推薦して下さい。

- 推薦の対象 昭和62年1月1日～12月31日間に高知市内で完工した建築物・築造物。
- 推薦の方法 どなたでも推薦できます。葉書に次の事項と、住所・氏名・年齢・職業

◆十月一日(木)、全国文化行政シンポジウムの一環として、「四国地区芸能フェスティバル」(事業団主管)をRKCホールで開催、四国各県の特徴ある獅子舞五種を紹介しました。

自由民権百年全国集会記念出版 土佐自由民権資料集

外崎光広編 A5判・344頁
定価3000円
「自由は土佐の山間より」といわれた、土佐の自由民権に関する基本的資料を網羅し、事件別に分類・収録した資料集。十一月中旬発行。

・電話番号を明記してお送り下さい。
葉書一通につき推薦は1件とします。

- ①建築物、築造物の名称
- ②所在地
- ③完成時期
- ④推薦の理由

▼送り先、問い合わせ先

〒780 高知市本町5-2-3

(財)高知市文化振興事業団

「高知市都市美デザイン賞」係

電話0888-7314365

なお推薦して頂いた方の中から抽選で20名の方に記念品を贈呈致します。

- 受付期間 昭和62年11月1日から63年1月31日(当日消印有効)まで
- 表彰 特賞1点 入賞2点

■坂本龍馬記念館設計コンペ開始を記念して、審査員の磯崎新、山本忠司氏らが参加するシンポジウム『ローカリティとグローバルティ』(事業団他主催)が、十一月十六日(月)、午後三時より、城西館・日輪の間で開催されます(入場無料)。ふるってご参加下さい。

財団法人 高知市文化振興事業団

〒780 高知市本町五丁目二番三号

TEL (〇八八八) ⑦四三六五

郵便振替 徳島8-14869